

校友の 歴史の重さ 手渡して 頼むぞ後輩 母校の未来 伝統を 守ってゆきます 我々も 富士見・浜浦 熱き心で



光安校友会相談役をはじめ役員の方・羽村生命歯学部部長・南雲学生部長と学生のみなさん

夏の球技大会は6月の終わりの土曜日に東小金井のグラウンドで行われます。

種目はキックベース・PK・リレーで、各部活や有志でチームを作り、また、この夏季球技大会にお祝いをいただいた校友会の先生方にも参加していただきました。

学年や部活の壁を超えて、普段話さない先輩後輩や同級生と交流する貴重な機会となっています。

屋外で行われるため、天候に左右されることもあります。各チームが優勝を目指してがんばりました。

生命歯学部5年
夏季球技大会実行委員長
飛山英里子



羽村生命歯学部部長から表彰状と賞品の授与

やった～！
賞品ゲット！！
がんばったもんね (^_-)

ボクけっこう、からだ動いているでしょ！



南雲学生部長ががんばる！明日は筋肉痛？

校友会からのごあいさつ

小山 理 副会長(55回)



四十数年前、東京下町で開業しました。高齢者の話し言葉は江戸弁でした。そこへインフォームドコンセントと予約診療制を持ち込んだら大混乱。

当時、医療の専門家に対する信頼は一般に高く、診療にあたって事前説明はほとんど不要でした。

説明の 果てには好きに やっつけ

予約診療制の評判が悪く、止むを得ず一日数時間を予約無しとしたら、予約をキャンセルしてその時間帯に殺到されてしまいました。

世間のことが何も見えていない自己中心の歯科医師でしたがそれでも信念は貫きました。

ひたすら診療に取り組んでいると予約制も次第に馴染み、家庭内のもめ事の相談もされるようになりました。

治療止め 家庭不和への 処方箋

定期的な検診の必要性の理解が深まり10年、20年と通院される方も増えました。

近づけば 皆一様に 口を開け

最近はお夫婦だけの所帯も多く、どちらかが認知症になると二人で来院されます。

付き添いでと云った方が 付き添われ

私は校友会、歯科医師会で医療人として最も大切な社会貢献について教わり育てられました。

もし入会しなかったらと想像するとぞっとします。今、心より感謝しています。

世の中に 溶け込み染まった A4に



創立107周年記念式典挙行!!

大幣を祓う音が、静まり返った生命歯学部富士見ホールに響き渡り、平成25年6月1日(土)、日本歯科大学107周年記念式典が挙式されました。中原 泉理事長・学長がホール壇上に設けられた神前に進み出て玉串を奉奠、参列者を代表して理事の先生方そして近藤勝洪校友会会長が、緊張の面持ちで玉串を奉奠し、厳かに神事が執り行われました。

式典であいさつされた中原理事長・学長が「日本歯科大学は世界一だという自負を持ち今後も研鑽に励むように」と結び、近藤会長が「校友会は110周年記念事業準備委員会を立ち上げ、母校の発展に尽力をつくす」と力強く述べられました。

その後、メリーランド大学歯学部長クリスチャン・ストラー博士への16号の名誉博士号授与式が行われ、続いて本学最初のベスト・ティーチャー賞などの表彰式が行われました。列席された来賓紹介後、全員で校歌を斉唱し本学の歴史の重さと輝かしい未来に、思いを馳せながら式典は幕を閉じました。



中原理事長・学長のごあいさつ



ストラー博士に名誉博士号を贈る中原理事長・学長

KOYU 豆知識

本学の前身・共立歯科医学校は明治40年6月28日に創立されました。開学した千代田区大手町1-5-1の都道には、「日本歯科大学発祥の地」として記念碑が建立されています。設立者代表は後に校長にも就任される中原市五郎先生でした。

えっ!“それではなんで6月28日が創立記念日ではないのですか?” って!

その後、共立歯科医学校は明治42年6月1日に、麹町区富士見町6丁目3番地(つまり現在地の千代田区富士見町1-9-20)に移転しました。移転と同時に校名を「日本歯科医学校」と改称し、この日すなわち6月1日を本学創立記念日と定めたからなのです。

7年前の2006年には“創立100周年記念全国校友大会(式典・祝賀会)”がホテルニューオータニ東京にて盛大かつ華やかに開催され、全国から二千人を越す校友が集いました。

平成25年度

Postgraduate course

校友会主催ポストグラデュエート・コース開催

勉強は在学中だけではなくありません。生涯を通して卒業後の皆様にも、日進月歩をする最新歯科医学を、ぜひ学んでいただきたく、校友会はそのお手伝いの場をご提供しています。

Aコース

7月7日(日)に附属病院口腔外科の担当により、「Aコース：口腔軟組織疾患(間違いやすい診断と処置)」が開催されました。
受講生：26名



Bコース

7月27日(土)、28日(日)に附属病院インプラント診療センター、生命歯学部解剖学第1講座と歯科放射線学講座の併催により、「Bコース：インプラント手術に必要な基礎的知識—下顎骨および口腔底部の解剖・画像診断・外科手術について—」が開催されました。
受講生：23名



Cコース

9月7日(土)、8日(日)には、新潟病院総合診療科在宅歯科往診ケアチーム新潟生命歯学部歯科麻酔学講座により、「Cコース：はじめよう歯科訪問診療 リスク評価から診療まで」が開催されました。
受講生：16名



お知らせ

校友会主催 学術フォーラム 2014

平成26年2月16日(日)に日本歯科大学にて学術フォーラム2014が開催されます。講演6題、テーブルクリニック6題を、さまざまな分野の先生にご講演いただきます。学生の皆さんも奮ってご参加ください。

平成25年度 歯学会大会・総会

発生・再生医学科学講座
田巻友一 (95回)



歯学会大会・総会は毎年、東京と新潟で交互に行われ、両学部の教職員が交流する貴重な機会となっています。今年は、「インプラント治療を再考する」というテーマ

で新潟生命歯学部にて開催されました。

特別講演では、本学姉妹校であるベルン大学頭蓋顎顔面外科学の飯塚健行教授が、ヨーロッパ圏におけるビスフォスフォネート製剤による顎骨骨髄炎の現状と、ベルン大学での診断基準または治療方針、治療システムの構想戦略を紹介され、日本の治療法とは異なる斬新なアイデアを興味深く拝聴しました。午後の部では、総会に続いて学術奨励賞の受賞講演が行われ、今年を受賞者である筆者と島津貴咲講師

が受賞研究について概説しました。つづいてインプラントの現状と未来に関するシンポジウムが行われ、中原貴教授、影山幾男教授、高森等教授、上田一彦講師の4名の演者から最新のトピックが紹介され、総合討議も活発に行われました。

今回、歯学会大会・総会に参加して感じたことは、研究および臨床には基本的に忠実な研究手法、診断や治療が求められるということです。これを踏まえて、今後も日々精進して頑張りたいと思います。

園遊会を開催しました

歯 学体結団式および園遊会は本学1階のメモリアルホールにて、校友会や教務学生部の先生方、学生会・誠和会・体育会の三部会、そして全運動部が集まり、全員が一致団結して夏季歯学体での活躍を祈願し大会へ送り出す式典です。

また、運動部が一堂に会し部活間

の親交を温める絶好の機会です。

この度の実行委員長という大役を通じ、その重圧を共に支えてくれた体育会の仲間たちの有難さ、日本歯科大学の温かさ、そしてお祝いをいただいた校友会の頼もしさを改めて感じる事ができました。関係各位の方々には唯々感謝いたします。



藤井校友会副会長のごあいさつ



生命歯学部5年
麦島健司



大川栃木県校友会会長、沼部歯周病学講座教授を囲んで

10日に歓談の時間をメインとし、和気あいあいと開催されました。肩を張らずに交流できるように、先生と学生、新潟と東京などと席を分けるのではなくランダムにしました。そのおかげもあり、先生からアドバイスをいただいたり、両校の違いなどを知ることができ、より有意義な時間となりました。また、今年は4年生による富士見・浜浦フェスタの報告など、内容が盛り沢山であり、3時間もあっという間に過ぎてしまいました。

私は毎回このつなぐ会に参加して

いますが、初めて参加した時は東京校の学生など誰が・どんな人がいるのかなど全く知らず、とても緊張していました。しかし今は、参加する学生や先生の多くが過去に交流したことのある方たちばかりなので、食事を楽しみながら会話を楽しむ余裕ができています。

この素晴らしい機会を後輩たちにも、そして他県の学生にもぜひ体験してほしいと思います。

新潟生命歯学部4年

木村加奈、大島千佳

東京校・新潟校をつなぐ会に参加して

『東京校・新潟校をつなぐ会』とは、日本歯科大学の栃木県人にとっては毎年の恒例行事となっており、今年で4回目の開催となりました。つなぐ会には、学生だ

けではなく、栃木県校友会会長の大川先生をはじめ、たくさんの栃木県の先生方も参加してくださっています。

第4回目となる今回は、先生方と東京校の学生幹事とで企画をし、8月

診療室での物語

カルテ No.3

「食べられないこと」 心で感じる



口腔リハビリテーション科 教授
(口腔リハビリテーション科長)

田村文誉

あ る施設での摂食指導(摂食機能療法)に、学生が同行した。そこは、親の病気や社会的な理由により育児能力がないため、家庭で生活できない0歳から6歳までの子供たち(未就学児)が入所する施設である。子供たちの数はおよそ40名、多くは健康(と思われる)だ

が、何割かは障害児も含まれており、スタッフは看護師と保育士が半数で常駐している。施設の性質上、親などが子供を取り返しに来る可能性もあり、警備は非常に厳重である。

施設に着くと、玄関で摂食指導担当の看護師が出迎えてくれた。

その日の予定は初診が数名入っていたが、その中に原因不明の奇形症候群で、拒食の3歳の女の子がいた。その女の子は歩くこともできるし、字を書いたりおもちゃで遊んだりすることもできる。知的な遅れはないようで、看護師や保育士に「抱っこして」と甘えるしぐさも見せている。しかし、片側の声帯が麻痺しており声が出せないため、大きな目でじっとみんなを見つめているのみであった。

どうしてこの施設に入ることになったのか？ わたしたちはいつも、この施設に来るとそう

疑問に思う。学生も同じだったようで、とても戸惑った表情をしていた。どうやら生まれたときに奇形があったことから、親が育児拒否をし、さらに虐待もみられたことからこの施設に引き取られたようだった。担当している看護師が、「○○ちゃん、全然食事に興味がないんですね。もうここに来てずっとこの調子です」と訴えた。声帯麻痺のために誤嚥のリスクも高いことがうかがわれ、誤嚥の苦しさから、食べることを拒否している可能性が高いと思われた。学生が、「どうやって食べているんですか？ そんなに食べなくて大丈夫ですか？」と聞くと、看護師は「胃瘻って見たことある？」と言い、女の子のお腹のあたりを見せてくれた。お腹の真ん中から数センチ、透明な白っぽいチューブが突き出ているのが見えた。「これが胃瘻です。ここから栄養を摂っているんです」。学生は思わず言葉

を失っているようだった。

服を着ていると、一見元気そう度で「どこが悪いのかな？」と思われた女の子が、実はそんな大変な状況になっていたとは。

わたしはそんな学生の様子を横目で見ながら、隣の子供の摂食指導をおこなっていた。それまで言葉少なだった学生が、徐々に看護師にいろいろと質問している声が聞こえてきた。そしてふと気づくと、その女の子に、スプーンから食事介助をしようとしているのではないか。もちろんその子には拒食があったため、ほとんど食べることはできていなかったが、それでもそうやって外から来た人が食べさせようとしてくれることには、嬉しそうな様子だった。

帰り際、学生が「今まで見学した施設の中で、一番悲しい施設でした」とポツリと言った。その彼の言葉は、今でもわたしの心にズッシリと刻み込まれている。